

第28回人文機構シンポジウム

妖怪空間——でそうな場所——

日 時：平成28年6月11日(土) 13:30～16:30
会 場：有楽町朝日ホール
主 催：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
後 援：文部科学省

主催者ごあいさつ

本日は、第28回人文機構シンポジウム「妖怪空間——でそうな場所——」に、ようこそおこしくださいました。

このシンポジウムを主催する大学共同利用機関法人 人間文化研究機構（略称：人文機構）は、日本に4つある大学共同利用機関法人のうちの1つで、人間文化研究にかかわる6つの大学共同利用機関（国立歴史民俗博物館・国文学研究資料館・国立国語研究所・国際日本文化研究センター・総合地球環境学研究所・国立民族学博物館）で構成されています。

6つの機関は、大学共同利用機関として国内外の大学の研究者に膨大な資料などの利用の機会を提供して共同研究を実施しており、人文機構はこれを支援しつつ現代社会における諸課題の解明と解決に挑戦するおおがかりな組織的共同研究を推進しています。また、情報発信・広報機能を強化して、精神文化・芸術などを含めて人文学・人間文化研究の社会的認知の向上を目指しています。

この取り組みの一環として、人文機構シンポジウムを開催しています。今回のテーマは「妖怪」ですが、そもそも、なぜ妖怪という心象が生まれ、語り継がれてきたのでしょうか。そして、現代社会にあってもなお次々と生まれ、愛され続ける妖怪は、日本人にとってどのような存在なのでしょう。本日ご講演いただく4人の先生方を水先人として、皆様とともに妖怪空間の旅を楽しみたいとおもいます。

平成28年6月11日

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
機構長 立 本 成 文

講師紹介

基調講演

小 松 和 彦 国際日本文化研究センター 所長

- 『妖怪学新考』（講談社学術文庫）講談社、2015 年
- 『妖怪文化入門』（角川ソフィア文庫）角川学芸出版、2012 年
- 『百鬼夜行絵巻の謎』（集英社新書ヴィジュアル版）集英社、2008 年

プレゼンテーション 1

齋 藤 真麻理 国文学研究資料館 教授

- 『異類の歌合——室町の機智と学芸』吉川弘文館、2014 年
- 『絵が物語る日本——ニューヨーク スペンサー・コレクションを訪ねて』（共著）三弥井書店、2014 年
- 『アメリカに渡った物語絵——絵巻・屏風・絵本』（共著）ペリかん社、2013 年

プレゼンテーション 2

常 光 徹 国立歴史民俗博物館 名誉教授

- 『妖怪の通り道——俗信の想像力』吉川弘文館、2013 年
- 『しぐさの民俗学——呪術的世界と心性』ミネルヴァ書房、2006 年
- 『学校の怪談——口承文芸の展開と諸相』ミネルヴァ書房、1993 年

プレゼンテーション 3

安 井 眞奈美 天理大学 教授／国際日本文化研究センター 客員教授

- 「妖怪が生まれるとき——目の妖怪」天理大学考古学・民俗学研究室編『モノと図像から探る妖怪・怪獣の誕生』勉誠出版、2016 年
- 『怪異と身体民俗学——異界から出産と子育てを問い直す』せりか書房、2014 年
- 『出産環境の民俗学——〈第三次お産革命〉にむけて』昭和堂、2013 年

パネルディスカッション 司会

佐 藤 洋一郎 人間文化研究機構 理事

- 『食の人類史——ユーラシアの狩猟・採集、農耕、遊牧』（中公新書）中央公論新社、2016 年
- 『イエローベルトの環境史——サヘルからシルクロードへ』（編著）弘文堂、2013 年
- 『知ろう食べよう世界の米』（岩波ジュニア新書）岩波書店、2012 年

妖怪の魅力はどこにあるのか？

小 松 和 彦

妖怪ブームといわれるようになってかなり経ちますが、まだその熱はいっこうに衰える気配がありません。むしろ一昨年、大ブレイクした「妖怪ウォッチ」によって、さらに拍車がかかった感があります。今夏も、江戸東京博物館の「大妖怪展」をはじめとして各地の博物館や美術館で、妖怪関連の催しが企画されています。もはや妖怪展は夏の風物詩となっているといっているようです。

周知のように、近年の妖怪への関心の高まりにおいて、昨年11月に亡くなった水木しげるの存在はとても大きいものがあったと思われます。水木しげるは、「河童の三平」や「ゲゲゲの鬼太郎」などの妖怪マンガを世に送り出ただけなく、妖怪画家として、姿かたちが描かれることが少なかった民間伝承のなかの妖怪に、次々に姿かたちを与えていきました。現代日本人の多くが思い描く妖怪イメージは、水木しげるの妖怪イメージを通じて形づくられているといっても過言ではないでしょう。近年の妖怪ブームは、水木しげるの妖怪画の人気と、それに刺激されて、その背後にある妖怪文化の伝統の再発見と、そして妖怪文化の学術的研究の促進によって生み出されたのです。

私どもの人間文化研究機構では、20年ほど前から、国際日本文化研究センター（日文研）を中心に、こうした怪異・妖怪文化に着目し、共同研究を重ね、その成果を、折々に展覧会やシンポジウム、研究成果報告書や啓蒙書の刊行等を通じて広く社会に還元してきました。例えば、2001年には国立歴史民俗博物館主催の企画展「異界万華鏡」、2009年には国立歴史民俗博物館・国文学研究資料館・国際日本文化研究センターの三機関共同主催による「百鬼夜行の世界」、広く一般に公開されている国際日本文化研究センターの「怪異・妖怪伝承データベース」「怪異・妖怪画像データベース」などが挙げられます。もちろん、その背後には、機構に属する研究者ばかりでなく、妖怪に関心をもつ研究者たち各人の研究があります。

今回のシンポジウムは、現代妖怪文化のシンボリックな存在であった水木しげるの追悼の意味も込めて、最近の妖怪研究の成果を披露するために開催されることになったものです。

しかしながら、妖怪文化の領野は広大であるとともに、学術的な観点からの検討もまだ初期的な段階に留まっているため、今回は特に「場所」にこだわって、題して「妖怪空間——でそうな場所——」というふうにテーマを設定することにしました。そして、具体的な場所の検討は、3名の報告者に委ね、私のこの基調講演では、そのためのプロローグとして、日本の妖怪の「特徴・魅力」と「でそうな場所」についての概説をすることにいたしました。

日本の妖怪文化は、海外の妖怪文化に比べてとても豊かです。この「豊かさ」が、日本の妖怪文化の最大の魅力だといえるでしょう。その特徴を大別するとおよそ次の五点にあると思われます。

第一の特徴は、「妖怪の歴史の長さ」です。日本では漢字を用いた最初の文書である『古事記』や『日本書紀』あるいは『風土記』の時代から、電子媒体が隆盛をきわめている今日にいたるまで、さまざまな媒体を用いて妖怪が語り描かれてきました。民間でも、口頭伝承（伝説や昔話、世間話）のかたちで、たくさんの妖怪譚が語られてきました。日本の妖怪文化は長い歴史をもっているのです。

第二の特徴は、「妖怪を描いた絵画の豊富さ」です。私はこの豊富な妖怪画にこそ日本の妖怪文化の魅力・独自性があると思っています。

妖怪画の歴史は、平安時代末期ころから説話集や口承の伝承に素材を求めた絵巻（「北野天神縁起絵巻」「春日権現験記絵巻」「不動利益縁起絵巻」など）のエピソードとして描き込まれるようになり、中世になると、妖怪をテーマにした絵巻や絵本（「大江山（酒吞童子）絵巻」「玉藻前絵巻」「付喪神絵巻」など）が作られ、江戸時代には、妖怪図鑑（「画図百鬼夜行」など）も編まれるようになりました。さらに幕末には妖怪・怪談芝居などにも素材を求めた妖怪錦絵が多数制作され、妖怪ブームの様相を呈しました。

第三の特徴は、民俗社会における「妖怪種目（名称）が驚くほど多いこと」です。例えば、私たちは、先述の「怪異・妖怪伝承データベース」を基礎に、『日本怪異妖怪伝承大事典』（東京堂出版、2013）を編纂しましたが、そこにはおびただしい数の妖怪種目名称が記されています。妖怪種目が多い理由の一つは、日本の信仰の基層に古代からのアニミズムの伝統があるからなのですが、さらに怪異現象に「名づけ」を行ってきたことも関係しています。似た妖怪でも名称が地方で異なることも関係しているでしょう。

第四の特徴は、これまでの特徴の延長上に出てきた特徴ですが、「妖怪の姿かたちの多様さ」です。このような特徴が生じた主な理由は、二つあります。

一つは、道具・器物の妖怪（つくも神）の登場です。人間が作った道具に目鼻・手足をつけたり、鬼や動物の特徴を付けたりして、妖怪化させることが、中世あたりから盛んになりました。もう一つは、絵師の創造です。江戸時代から、姿かたちが無い、あるいは定かでないような怪異現象としての民俗的妖怪種目を、絵師がその想像（創造）力を発揮して、絵画・造形化することも盛んになりました。しかもこの伝統は今も続いています。水木しげるもその流れを組んでいます。

第五の特徴は、「かわいらしさ」です。古代・中世では、妖怪は、なによりもまず恐怖すべき現象・存在でした。しかし、時間の経過のなかで馴化されるにつれて、「キャラクター化」、言い換えれば「娯楽・消費の対象」となって、人々の生活のさまざまな分野に浸透していきました。妖怪玩具が作られ、印籠や根付の表面の装飾彫刻絵の素材となったり、食品関連の商品名にもなったりしています。その過程で、異形の妖怪も、どんどんかわいらしくなっていきました（図1）。現在も、かわいらしい妖怪グッズは、人気商品なのではないでしょうか。



図1 「はぢっかき」

さて、こうした、まことに広範な領域にわたる、内容豊かな妖怪文化を研究する場合、一方では妖怪文化全体を俯瞰し、総合的に、つまり研究ジャンルを超えて、書承、口承、絵画造形、生活文化、その歴史の変遷等々を自在に行き来する必要があります。しかしそのいっぽうでは、各種の妖怪の個別の性格や歴史など把握する必要もあります（「鬼」の歴史とか「河童」の歴史といった具合に）。

私どもの妖怪学もしくは妖怪文化論は、そうした総合的・学際的な研究分野として構想されているわけです。そうした総合的な視野をもちつつ、個別の事例を考察しなければ、奥行きのある妖怪理解はできないでしょう。今回の「場所」への焦点化も、その一里塚にすぎないわけです。

それでは、今回の「でそうな場所」とは、どのような場所なのでしょう。ひと言でいえば、それは「境界」です。「境界」とは、ある領域と別のある領域とが接する場所ということです。わかりやすく説明すると、ここに一枚の紙があるとします。「上」を向いている側を「表」とすれば「下」側は「裏」です。とすれば「表」と「裏」の接するところが境界です。この紙が本のように厚みをもっていれば、その厚み・広がり領域が「境界域」ということになります。また、「表」の領域の任意のところに「表」を二分する線を引いたとしましょう。するとその線が「境界」となります。つまり「表・A」「表・B」と仮に呼べる領域ができたわけです（図2）。そしてその線が広がりのある太い線ならば、その幅が形成する領域が「境界域」です。

ここまでは、紙の外側からの説明でしたが、紙の面のある地点に経った場合について説明しましょう。「表・A」の面のある地点に立ち、そこから「境界」を眺めると、「表・A」の側は「内」側、「表・B」の側は「外」側ということになるでしょう。逆に、「表・B」の面の側のある地点に立った場合は、「表・B」側が「内」側、「表・A」側が「外」側になります。これをモデル化すれば、自分の立つ地点が「中心」であり、その外側の任意のところに描かれた円形の線が「境界」、そして、その線の「内側」、その線の「外側」ができます。さらにその「内」側についても、「中心」に近づけば近づくほど親密度が高まり、遠のけば遠のくほど疎密度が高まります。つまり、じつは「内」側にも心理的にはたくさんの「境界」（同心円）が引かれているのです（図3）。

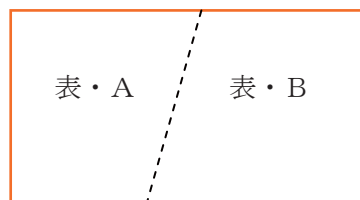


図2

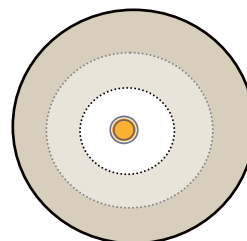


図3

これまでは空間論的な「境界」について説明してきましたが、同様の考えは、「時間」についても言えます。一日についていえば、「昼」と「夜」の「境界」、一年についていえば、「今年」の終わりと「来年」の始まりとしての「境界」、人の一生でいえば「生」と「死」の「境界」です。

そして、「出そうな空間」というものを考えるときには、こうした物理的、心理的な「内」と「外」に加えて、宗教なあるいは呪術的な意味での「境界」、非人間的存在の領域、つまり神仏や妖怪たちが

棲む領域との「境界」が想定され、しかもその「境界」と前述との「境界」が、多くの場合、重なってくるわけです。すなわち、「境界」の向こう側の「異界」から、時と場合によって、神仏や妖怪たちが「境界」を越えてやってくるのです。こうした宗教的・呪術的な意味での「境界」の設定は「結界」とも呼ばれます。その具体的な典型は「標縄」（注連縄曳き）でしょう。

理論的には、「境界」は任意に設定することができます。しかしながら、自己や自己の住居とそれを取り囲む人工的なあるいは自然的な環境によって、「境界」となりやすい場所があります。

自己の身体の場合は「境界」は「皮膚・外皮」で、そこを結界として悪霊等の侵入を防ぐための装置が肌身につけた「お守り」です。住居についていえば、その「境界」は、「戸口・軒」であって、そこにやはり悪霊侵入防止の「お札」や「注連縄」「呪的な道具」を取り付けたりします。さらに「門」や「集落の入り口」、「ムラ境」とされる「辻」や「峠」、「川」などが「境界」となり、同様にして「注連縄」「地蔵」や「道祖神」「強大な人形」などが設置されます。

また、留意しなければならないのは、「昼」と「夜」の交代です。「昼」は太陽の光の下で人間が活動する時間ですが、「夜」は深い「闇」が湧き出てきて軒下や家のなかにまで押し寄せます。そして、いうまでもなく、この「夜」の「闇」を、悪霊・妖怪たちは住处・活動の場に行っているのです。

ここでは、悪霊の侵入を防ぐための結界設置の興味深い一例として、祇園八坂神社の祭神であった「牛頭天王の縁起」（蘇民将来札の起源譚）を紹介してみましょう。

「豊饒国の牛頭天王が龍宮の沙羯羅龍王の三女・婆利采女を妻に迎えに行く途中、金持ちであるが慳貪な古端将来に宿を求めて断られた。だが、貧しいながらも善良な蘇民将来に精いっぱいのもてなしを受けた。龍宮で妻のみならず八人の子までも得た牛頭天王は、故国への帰路、再び蘇民将来の家に宿を取り、「蘇民将来子孫也」という札をもった者以外の者たち、いいえれば、宿を断った古端一族をみな殺しにした」。

興味深いのは、占いで不吉なことが起こることを察知した古端が、千人の僧を招いて大般若経を唱えることで、牛頭天王が派遣した眷属たち（古端にとっては悪霊たち）の侵入・攻撃を防ごうとしていることです。それを、縁起は、次のように語っています。「大般若六百卷の経は、四十丈六重の築地となり、経の箱は天蓋となって、牛頭天王の眷属の侵入を阻止した」と。つまり、古端は、大般若経の呪力で結界が設けられて、その内部に籠もって守られたのです。ところが、僧のなかに、前夜の深酒で居眠りして経文を飛ばして読んだ者がおり、そこが結界を破る「穴」となって、眷属（悪霊）が



図4 「羅城門渡辺綱鬼腕斬之図」

侵入し、ついに古端一族は滅ばされてしまいます。

私たちの先祖は、幾重にも結界を設けて災厄をもたらす悪霊の侵入を防ごうとしてきました。しかし、悪霊たちもまた、人間の油断をつき、またさまざまな工夫を凝らして、人間世界に侵入してきました。人間の側も「境界」を越えて侵入してきた悪霊・妖怪たちを、武力であるいは呪力でもって撃退に努めました。いや、正しくは、そういった内容の物語をたくさん紡ぎ出してきたというべきかもしれません。そして、そうした物語や悪霊退散の儀礼が行われる場所を丹念に調べてみると、その多くが「軒」「門」「橋」「辻」「川辺」といった「境界」であることに気づくはずです。

極端な言い方をすれば、悪霊・妖怪出没の空間・場所、つまり「でそうな場所」とは、どこであれ「境界」なのかもしれません。稲生平太郎の家のさまざまな所から、妖怪が次々に出没する「稲生物怪録」などは、そのことを物語る好例といえるでしょう。

注：図1「化物尽絵巻」（日文研蔵）より、図4 芳年「羅城門渡辺綱鬼腕斬之図」（日文研蔵）

妖怪たちの秘密基地

つくもがみ —付喪神の絵巻から—

国文学研究資料館
齋藤 真麻理

第28回人文機構シンポジウム
「妖怪空間—でそうな場所—」20160611於朝日ホール

はじめに

『付喪神絵巻』は御伽草子（室町物語）。

『百鬼夜行絵巻』や、祇園祭など祭礼との関連が論じられており、本文には『弘法大師行状絵巻』が引用されている。

今回は、岐阜県崇福寺に所蔵される室町時代の『付喪神絵巻』を中心に、妖怪たちの「秘密基地」と宴に注目してみたい。彼らはなぜ現れ、どこへ去っていったのか。

I 妖怪たちの秘密基地

II 詩歌を詠ずる妖怪

①歌人のすがた

②鞆鼓の響き

III 京の都と妖怪空間

①疫神と祭礼

②「数珠の一連」

『付喪神絵巻』のあらすじ

【上巻】

- ・康保（こうほう・964－968）の頃、歳末に捨てられた古道具たちは、妖怪となり、人間に仕返ししようとたくらむ。
- ・反対した「数珠の一連」は仲間に叩き出され、出家する。
- ・節分の夜、一同は古文先生の教えに従い、妖怪となる。
- ・船岡山のうしろ、長坂の奥に住みつき、京白河へ出ては人畜を取り食らう。

・3月、妖怪たちは宴を催し、栄華をきわめる。

（・4月、変化大明神の祭礼を行うが、途中で関白一行と出会い、尊勝陀羅尼の力で退散する）

【下巻】

- ・宮中で妖怪調伏の祈祷が行われる。
- ・妖怪たちは「数珠の一連」を頼って出家。東寺の門流に加わる。やがて山林幽谷に入って修行し、成仏する。

※絵巻は2系統。①崇福寺蔵の絵巻。室町時代。東寺伝来。祭礼場面を欠く。②江戸時代の模写絵巻9点。多くは寛文6年（1666）模写と伝える。京都大学や国会図書館等に所蔵。

・柴田芳成『『付喪神』解題』（『京都大学蔵むろまちものがたり』、2001）

・田中貴子『百鬼夜行の見える都市』（ちくま学芸文庫、2002）

・小松和彦『百鬼夜行絵巻の謎』（集英社新書、2008）

I 妖怪たちの秘密基地

船岡山

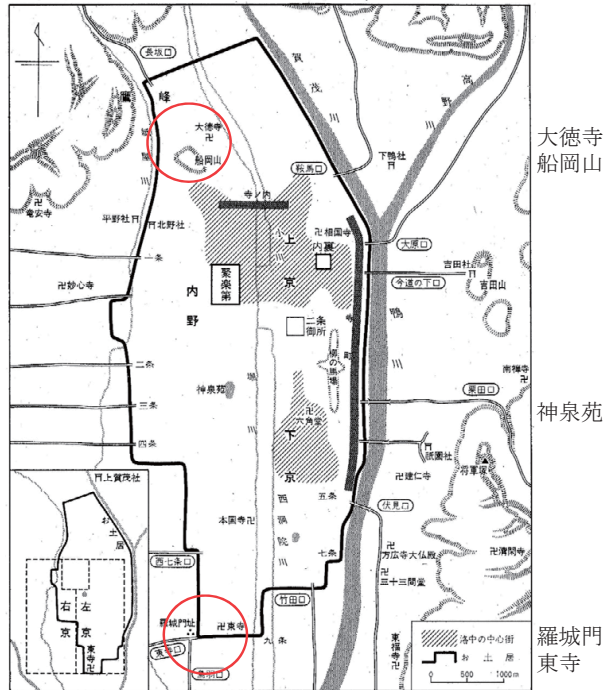
- ①^ね子の日の遊びが行われた景勝地
- ・子の日してよはひをのぶる船岡は松の千とせをつめばなりけり(『経信集』16番)
 - ・船岡やむかしの子の日あとふりて昨日ののべに松風ぞ吹く 後鳥羽院(『夫木和歌抄』巻21「岡」)

②葬礼の場所

- ・船岡のほとりをすぎるに、高いやしき塚どものひまなきを見て(『教長集』942番)

③疫神のため、^{ごりようえ}御霊会を修した場所(後述)

- ※大徳寺／現存中、最古といわれる『百鬼夜行絵巻』を所蔵
- ※神泉苑／疫病神をはらう場。百鬼夜行の出現(『宝物集』等)
- ※羅城門／鬼のすみか。詩を詠む鬼(『十訓抄』等)



天正18-19年(1590-91)頃の京都
(『京都の歴史』4、京都市、学芸書林、1969年)

2

II-①歌人のすがた

A 詩を作る妖怪たち



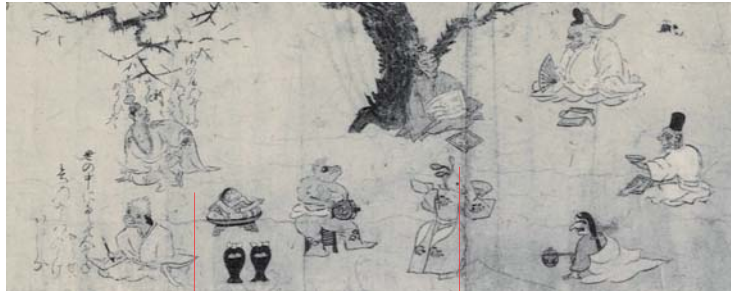
国会図書館蔵『三十六歌仙』より、
おおどものやかもち みなものさねあきら
大伴家持 源信明(同館デジタル画像)



国文研蔵『時代不同歌合絵巻』より、
おののたかむら くじょうかねざね
大伴家持 小野篁 九条兼実



B 人肉の酒宴を楽しむ妖怪たち



桜と僧侶＝西行のイメージ。
「願はくは花の下にて春死なん
そのきさらぎの望月のころ」

サントリー美術館蔵『酒伝童子絵巻』(『お伽草子』展図録)より、
人肉の宴を楽しむ酒呑童子。大永2年(1522)、狩野元信筆。

(ABともに崇福寺本。画像は『鬼神とまじない』岐阜市歴史博物館、1990による)

3

Ⅱ-② 鞆鼓の響き

題花

吾変ニ明皇^{かみ}按^{おさ}樂来^ら(われ明皇に變じ樂を按じ来たる)

華驚ニ鞆鼓^{かこ}一時開^{ひらく}(華は鞆鼓に驚き一時に開く)

今宵共奏春光好^{かな}(今宵ともに奏つ春光好)

永使^{とこ}茲身不^な化^{あへ}埃^い(永くこの身をして埃に化せざらしむ)

※明皇^{めい}玄宗。七一二〜五六。唐の第九代皇帝。楊貴妃との悲劇は、白楽天の「長恨歌」などで名高い。「春光好」は玄宗の作曲した曲。春二月、玄宗は、宮中でまだ咲いていない柳杏を見てこの曲を作り、鞆鼓を打った。すると、花は一斉に咲いた『鞆鼓録』ほか。

同題

珠簾影動落花春^{しゆれん}(珠簾影動く落花の春)

蝴蝶成^{なり}媒^{まへ}惱^{なや}美人^{びじん}(蝴蝶なかだちをなし美人を悩ます)

人似^{ひと}妖^{あや}紅^{こう}如^{ごと}夢^む(人は妖紅に似て一夢のごとし)

須^す下^{した}傾^{かたむ}鸚鵡^{おうむ}酒^{さけ}沾^ぬ唇^{くちびる}(すべからく鸚鵡を傾け酒唇を沾すべし)

次韻變化物二首

春風花下詠^{よめ}詩来^{しき}(春風花下詩を詠じ来たる)

万^{ばん}朵^だ紅粧染雪^{こうさうせんせつ}開^{ひらく}(万朵の紅粧雪を染めて開く)

奇語韶光莫^な相背^{あひそむ}(奇語韶光あい背くことなし)

此生改^{あらた}変^へ旧塵埃^{きゅうじんあい}(この生改変す旧塵埃)

化魂相樂欲^{ほろ}酬^{むか}春^{はる}(化魂あい楽しみ春にむくいんと欲す)

孰^た与^よ邯鄲夢裡人^{かんたんむり}(邯鄲夢裡の人にいずれぞ)

好認^よ清香^{きやうかう}為^な酒伴^{さけばん}(よく清香を認め酒のともとなす)

仙桃醉^{せんたう}露^る小紅唇^{せうこうくちびる}(仙桃露に酔う小紅唇)

(崇福寺本『付喪神絵巻』)

4

鞆鼓催花の故事



狩野山楽(1559-1635)筆「鞆鼓催花図屏風」
(ボストン美術館蔵。同館HPのデジタル画像)



ぎょうこうようず
「鞆鼓催花・御溝紅葉図屏風」より、
鞆鼓を演奏する玄宗皇帝
(『日本屏風絵集成』4、講談社、
1980)

- ・玄宗と楊貴妃の故事は、15世紀後半に画題として定着。それらを描いた調度が当時の知識人の周辺を飾り、詩にも多く詠まれていた。
- ・「鞆鼓催花」も愛好された故事の一つ。当時の辞書『下学集』『鞆鼓』の項にも記載。
- ・宮廷の風俗画として親しまれた一方、栄華に対する戒め、反乱や衰退を連想させる詩も作られた。
- ・武田恒夫「玄宗皇帝絵」(『国華』1049号、1982年3月)
- ・岩山泰三「五山詩における楊貴妃像——題画詩と『後素集』——」(『国文学究』131号 2000年6月)
- ・同「『狂雲詩集』楊貴妃関係詩群」(『国文学研究』111号、1993年10月)

→妖怪たちの宴のはかなさ

5

Ⅲ-①疫神と祭礼

・疫神と器物の妖怪(『不動利益縁起』等)

・正暦5年(994)6月、疫病が流行し、船岡山で御霊会が行われる。
長保3年(1001)にも疫病が流行、紫野に社殿と神輿が造られ、今宮と号す。久寿元年(1154)、紫野社に人々が集まり、「夜須礼」を行う。以後、3月10日にこの地で疫神を鎮める祭礼「やすらい花」が行われる。

・『梁塵秘抄口伝集』巻14(平安時代末期)

久寿元年三月のころ、京ちかきもの男女、紫野社へ風流の遊びをして、歌笛たいこすりがねにて、神あそびと名づけて群がり集まり(中略)、傘の上に風流の花をさし上、わらはのやうに童子にはんじり着せて、胸にかつこをつけ、数十人ばかり、拍子に合せて乱舞のまねをし、悪気と号して鬼のかたちにて首に赤きあかたれをつけ、魚口の貴徳の面をかけて、十二月の鬼あらひとも申すべきいで立ちにて、おめき叫び狂ひ(中略)、上達部など内も参り集まり、遊覧におよびぬ。

・祇園祭でも長刀鉾をはじめ、鉾の上で「鞆鼓稚児舞」が演じられる。

・河音能平『中世封建社会の首都と農村』(東京大学出版会、1984)

・山路興造『京都 芸能と民俗の文化史』(思文閣出版、2009)

・植木行宣 田井竜一編『祇園囃子の源流』(岩田書院、2010)



『不動利益縁起』の疫神。
つのだらいや五徳のすがた。
14世紀。(『続々日本大成』中央公論社、1995年)



出光美術館蔵『祇園祭礼図』の
鞆鼓稚児舞。慶長頃(1596-
1615)。(『近世風俗図譜』小学
館、1982)

6

Ⅲ-②「数珠の一連」

「東寺伝来」の崇福寺本『付喪神絵巻』



数珠の一連
(京都大学蔵『付喪神』
同大公開のデジタル
画像より)



東寺蔵『弘法大師行状絵巻』より、皇帝から
念珠を賜る空海(御遠忌千百五十年記念出版
『弘法大師行状絵巻』東京美術、1981)



97 菩提念珠

空海が唐の皇帝から賜ったという念珠
(『東寺』朝日新聞社・1958)

京の都と妖怪空間—境界から境界へ—

7

家屋敷と妖怪

常 光 徹

1 屋根（棟）の境界性

(1) 昔話「食わず女房」——屋根からのぞく——

夜なかに屋根の上で音がしたので、来るぞと寝たふりをして待っていると、屋根から婆が下をのぞいている。婆は大ぐもに化けて下りてきたので、爺たちは起き上がって大火を焚き、「おとちこ、せえちこ（一昨日来い、再昨日来い）」と焼き殺す。翌朝見るとくもは山姥になって死んでいた。

島根大学昔話研究会『隠岐島前民話集』1977年 『日本昔話通巻』18より

(2) 「賭づくをして、我が子の首を切られし事」『諸国百物語』巻三

男は女房の帰るを待ち兼ね、夜着を冠り、かたかたと震ひて居たりしが、屋根の上より、人廿人ばかりの足音にて、どうどうと踏み鳴らし、「何とて汝はは賭けしたる所へ行かぬぞ」と呼ばはる。男は、なほなほ恐ろしくて、息をもせずして、^{すく}竦み居たり。」 高田衛編・校注『江戸怪談集』下（1989年）

(3) コトヨウカと棟

コト八日の前夜を北蒲原郡では、オッカナの晩げという。この夜は、一つ目の化け物がくるといわれ、目の多い^{おし}・箕・ザルなどを門口にさげる。（新発田市）川東地区では、厄神が家に入ると鍋・釜・下駄の歯にまで化けるといい、屋根のグシ（棟）の上で半切に水を入れてみると狐の嫁取りや祝言、葬式のある家の様子がわかるとし（五斗蒔）、みの・笠を逆さに着て、屋根のグシに上ってみると、火事・災難の家がわかるという（滝谷）。六日町五十沢郷では屋根のグシの上で股からのぞくと、化け物や死者の姿がみえるといわれている。『新潟県史 資料編22 民俗・文化財2 民俗編Ⅱ』（1984年）

(4) 山本陽子「説話と絵画に見る屋根・天井・軒における怪異」『説話・伝承学』22号（2014年）
「そこで想起されるのが、冒頭に挙げた『上杉本洛中洛外図』の、端午の節句の軒に菖蒲を葺く風習である。先が尖った葉型の菖蒲はその香とともに、刀にも例えられて魔除けとされる。葉先の尖った菖蒲は、これらのような軒から顔を出して逆さ覗きをする体勢の魔物を対象として軒に葺かれたと考えられる」



屋根からのぞく鬼「春日権現験記絵」巻八（模本）



高知県立歴史民俗資料館 土佐の山村民家

2 破風を出入りする妖怪

(1) 渡辺綱と鬼

此ハ我カ手ナレハ取テ行ソト云ママニ怖シケナル鬼ニ成テ空ヘ光リテ破風ヨリ伝テ出ニケリ

佐藤謙三他編『屋代本平家物語』下巻（1973年）

(2) 破風作らず

常吉村は源頼光の臣箕田源次渡辺綱の領地にして、綱の伯母此所に栖みしかば、羅生門にて切りし鬼手を鬼女来りて奪還し、破風より遁げ失せしゆゑ、村民破風造の家を建てずとの古伝あり。昌徳二年洪水の為流失して、村の所在を異にすという。又綱の子孫此地に存するものあり。（兵庫県西宮市尼ヶ崎）『武庫郡誌』

福田晃他編『日本伝説体系』8巻（1988年）

(3) 昔話「食わず女房」—— 破風から侵入してくる ——

「逃げられた。今夜はくもになって化けて行き、取ってやる」と言っている。男は家に帰り、人に集まってもらい、いろりで火を焚いていると、夜中に破風からくもが入ってきて自在鉤を伝っておりてくる。くもを火の中に落とすと大きな鬼だった。夜のくもは必ず殺すものだという。（島根県頓原町〈飯南町〉）大谷女子大学説話文学研究会『島根県飯石郡頓原町昔話集』（1971年）『日本昔話通巻』18より

(4) 昔話「食わず女房」—— 破風から出て行く ——

へえから、「もう長しゅうご厄介になりまして、すみません」いうて、ええ女房が大けなくもになって、這うて去んだいうてなあ。破風い向けて這うて上がったいうて。へえでもう、昔ゃ破風板いうもんがなかったんじゃ。それから破風板いうものをこしらえだあたんじゃ。昔こっぶり。（岡山県哲西町〈新見市〉）稲田浩二・立石憲利『中国山地の昔話——賀島飛左唄伝承四百余話』1974年『日本昔話通巻』19より

(5) 森隆男「渡辺綱伝説からみた住居」『住居空間の祭祀と儀礼』（1998年）

「神霊と交流する特異な箇所であり、また神霊の出入口になることもあったのである。換言すれば、破風とは住居と神霊の世界との境界に当たる象徴的なところということになろう」



狐の窓 「新板化物念代気」文政2年 国立歴史民俗博物館蔵



高知県立歴史民俗資料館
土佐の山村民家

3 庭・庭木・雨だれ・厠・井戸

(1) 目籠と鬼

二月八日籠を掲げて鬼を避くるには、いろいろの理由もありなんが、一つは鬼が籠目の数をよみ尽すうちに、その邪力耗散すとの意もなきにあらじ。

南方熊楠「小児と魔除」『南方熊楠全集』2巻（1971年）

(2) 庭木の禁忌

屋根より高く伸びる木も嫌われ、屋敷内の木が屋根よりも高くなるとその家は繁盛しない。家運が傾く、不幸になる（秋田・神奈川・長野・富山・愛知・福井・和歌山・山口・佐賀）

鈴木棠三『日本俗信辞典——動・植物編——』（1982年）

(3) 雨だれと三途の川

幡多郡大方町湊川では、棺を出すとき、まず敷居まで出し、ここを三途の川とよんで一文銭を落として渡るといふ。雨だれ落ちを三途の川というのは、広く高知県下の各地にある。

桂井和雄『生と死と雨だれ落ち——桂井和雄土佐民俗選集』2巻（1979年）

(4) 便所にでるカイナゼ

滋賀県の湖西中部から北部にかけて、節分の夜に便所に行くとカイナゼ、又はカワナゼと呼ぶ怪物に、毛のはえた手で尻をなでられるという俗信が分布する。森隆男『住居空間の祭祀と儀礼』（1998年）

(5) 奥州小松の、城ばけ物の事

この妻は、同国宇和岐の何がしかの娘にてありしが、ある夜、雪隠へ行きければ、向うより、鉄漿くろぐろと付けたる、女の首ひとつ飛び来たりて、妻を見て、にこにこと笑ふ。この妻、恐ろしくは思ひけれども、かやうの物に、見まけぬれば、悪しきと心得て、目を見ひらき、睨みつけて居られければ、かのくび睨み負けて、次第々々に遠ざかりゆきて、つひに消え失せけると也。高田衛編・校注『江戸怪談集』下（1989年）



こと八日の魔除け 埼玉・日高町〈日高市〉
文化庁『日本民俗地図』Ⅰ（年中行事）



高知県立歴史民俗資料館 土佐の山村民家

4 蚊帳と幽霊

(1)

蚊帳を覗きこむ幽霊のモチーフはそれ以前からよく知られている。四世鶴屋南北作『小幡小兵次』（歌舞伎脚本）に登場する、蚊帳越しに覗きこむ幽霊を描いた葛飾北斎の「百物語 こはだ小平二」は有名だが、歌川豊国「小平次、妻の二役 尾上松助」でも、両手を垂れた小平次の幽霊が蚊帳の中で眠る妻を覗きこむ場面が描かれている。蚊帳の上部の隅には赤い布の上に×印がみえる。赤色と×は魔除けの意味を帯びていると思われ、蚊帳のなかでは上端のこの四隅が重要視されていることがわかる。

常光徹「蚊帳をのぞく幽霊」『妖怪の通り道 ― 俗信の想像力 ―』（2013 年）

(2)

アッと思はず聲を上げんとすれば女（幽霊）はする々と音も無く動き歩きて、蚊帳の周囲を一廻り、二廻り、三廻りばかり廻りたりと思ふ間も無く掻き消す如く姿は見えずなれり

九州日の出新聞 明治 41 年 7 月 5 日「幽霊蚊帳を廻る」

(3)

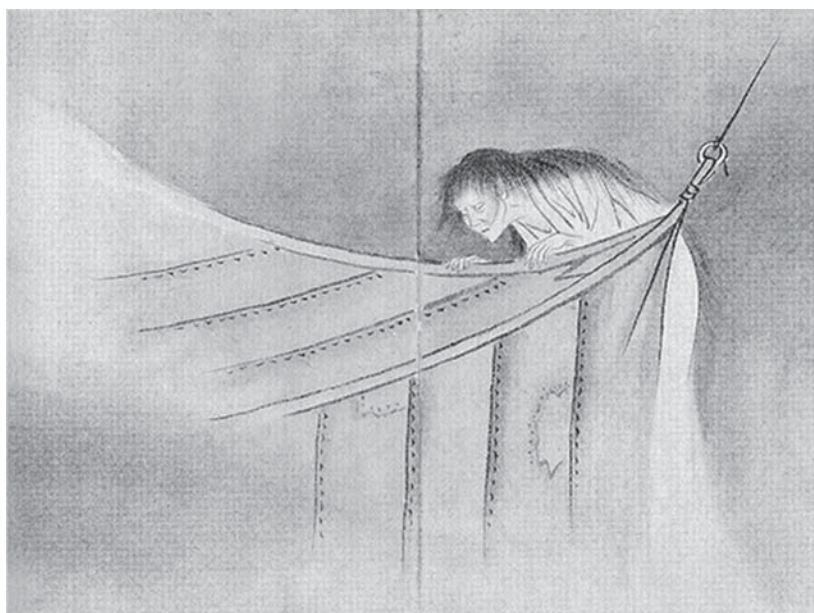
藤田がフト目を覚まして、何んの気なしに蚊帳の天井を仰ぎ見ると、意外、凄^こい程白い若い女の顔が目たたきもせず、凝つと一心に自分の蚊帳の中を覗いて居る

名古屋新聞 明治 42 年 8 月 12 日「蚊帳越しの女」

湯本豪一編『明治期怪異妖怪記事資料集成』（2009 年）

(4)

- 幽霊に追われたら蚊帳の中にかくれよ。入口が無いから入れない（沖縄県大宜味村）
- 親戚が死んだ時は魂が来る、其の際蚊帳を吊って置けば入らない（秋田県由利郡）



蚊帳をのぞきこむ幽霊（『百鬼徒然袋』より 国立歴史民俗博物館蔵）

妖怪が狙う身体部位

安 井 眞奈美

1. 身体という視点から妖怪を考える

かつて病気は、妖怪や悪霊が身体に取り憑くことによって生じると考えられてきた。では、妖怪や悪霊は、いったい人間の身体のどこから侵入すると考えられてきたのだろうか？

本発表では、妖怪が狙う身体部位について民俗学の研究成果をもとに検討し、その背後に潜む人々の身体観について明らかにしたい。なぜなら、身体について考えることが、人間が外界をどのように把握してきたかという世界観の解明につながるからにほかならない。

そのために用いたのは、国際日本文化研究センターの「怪異・妖怪伝承データベース」(<http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiDB/>)である。「怪異・妖怪伝承データベース」は、2002年に「民俗関係の調査などでこれまでに報告された怪異・妖怪の事例を網羅的に収集して、その全体像を把握することを目的」に作成されたもので、2014年の更新時ではデータ数が35,826件、以降、現在に至る。

「怪異・妖怪伝承データベース」を用いて、妖怪に関する膨大なデータの中から身体に関するものを集めて分析し、そのデータをもとに、妖怪はどのような身体部位を好んで侵入してきたのか、またどのような身体部位に怪異現象が起りやすかったのかを考察した。

2. さまざまな身体部位

『大辞林』（1988、三省堂）の「からだ（身体）」の項目を参照し、以下のように39の身体部位を抽出した。

*身体の大区分（4ヶ所）

アタマ（頭）・ドウ（胴）・テ（手）・アシ（足）

*中区分（20ヶ所）

〔頭〕カミ（髪）・カオ（顔）・ヒタイ（額）・マユ、マユゲ（眉、眉毛）・メ（目）・ハナ（鼻）・ホオ（頬）・クチ（口）・ミミ（耳）・アゴ（顎）

〔胴・手・足〕クビ（首）・カタ（肩）・ムネ（胸）・ウデ（腕）・ハラ（腹）・マタ（股）・スネ（脛）・セ、セナカ（背、背中）・コシ（腰）・シリ（尻）

*小区分（15ヶ所）

〔頭〕コメカミ・クチビル（唇）・ノド（喉）

〔胴・手・足〕チブサ（乳房）・ヒジ（肘）・ヘソ（臍）・ユビ（指）・ヒザ（膝）・ツマサキ（爪先）・スネ、ムコウズネ（脛、向こう脛）・ウナジ（項）・ボンノクボ（盆の窪）・ワキ、ワキノシタ（脇、脇の下）・テノヒラ（掌）・カカト（踵）

3. 妖怪に狙われやすい身体部位

2で検討した39の身体部位をキーワードにして「怪異・妖怪伝承データベース」を検索し、伝承の件数を調べた。それを「ヒット数」とし、そのうち有意のものを「データ数」とした。結果は、表1・図1・図2で示す通りである。

ただしこの「データ数」の中には、次の2種類のデータが混在している。つまり1) 怪異現象が起こりやすいとみなされてきた身体部位に関するデータと、2) 身体に基づく妖怪のデータである。たとえば「目」のデータの中には、1) 目の疾患に関するデータ、と2) 一つ目小僧の妖怪に関するデータが含まれている。これらは分けて考える必要があり、本発表では、1)のデータに注目した。

4. 狙われたさまざまな身体部位

「足」と「手」——かつて人々は、手足を駆使して労働し、生産を行っていた。手足に怪我をすることが多く、妖怪・怪異現象が原因とみなされた場合も多かったと考えられる。

仮説)

悪霊や妖怪は、身体の開口部から侵入する。

* 身体の開口部の事例

「目」：目の疾患や一つ目小僧のデータだけではなく、目いぼ・目ばちこを治す呪術も含まれている。

「鼻孔」——魂が抜け、悪霊が侵入する。

「耳」——怪異を聞き分ける。

「口」——妖怪・口裂け女の大きな口

「性器」——蛇の侵入路

「肛門」——河童が手をつっこむ

表1 身体各部位のヒット数とデータ数

	部位	ヒット数	データ数
1	足	945	854
2	手	1,357	564
3	目	630	548
4	頭	842	531
5	首	480	394
6	髪	344	326
7	腹	376	312
8	顔	370	298
9	背	357	289
10	尻	301	279
11	耳	181	149
12	鼻	157	118
13	指	207	113
14	腕	112	85
15	脇	65	65
16	口	82	64
17	胴	59	59
18	肩	57	57
19	胸	70	52
20	股	79	47
21	喉	63	46
22	額	60	40
23	腰	255	37
24	膝	30	27
25	掌	37	27
26	眉	28	24
27	臍	22	21
28	頬	19	18
29	唇	14	13
30	乳	89	13
31	脛	10	10
32	踵	8	8
33	顎	5	5
34	腿	3	3
35	肘	3	3
36	盆の窪	2	2
37	こめかみ	1	1
38	爪先	1	1
39	うなじ	1	1

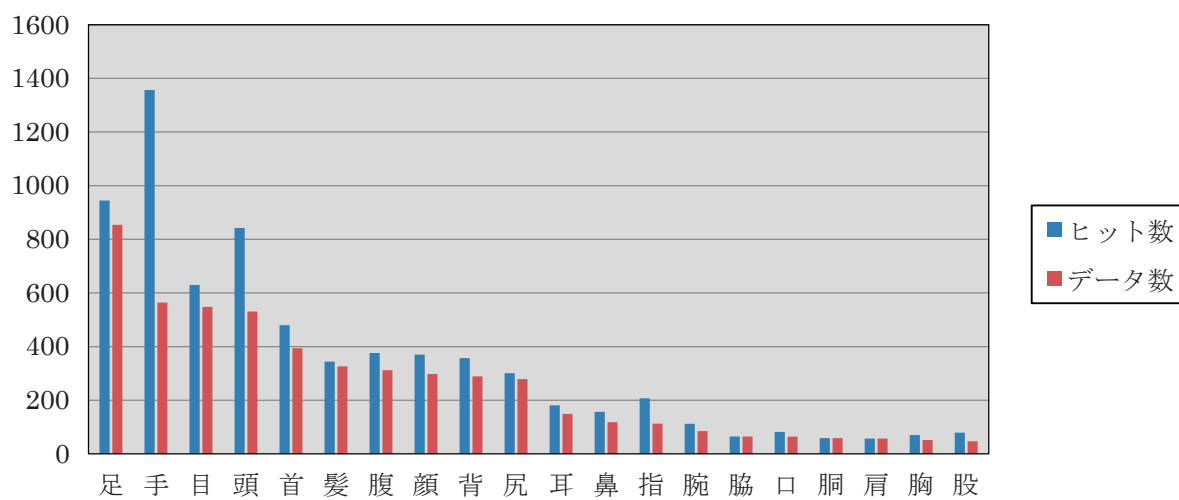


図1 身体の部位別怪異・妖怪伝承データ数（上位20）

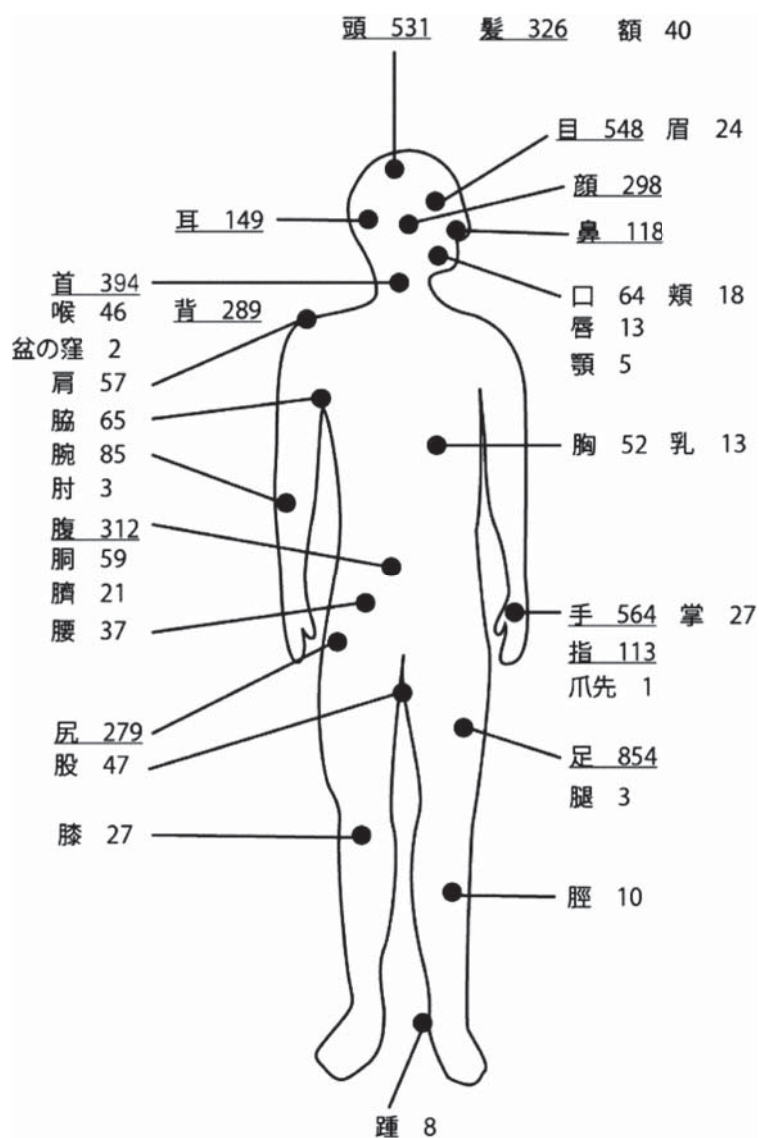


図2 身体部位別データ数（100以上のデータにアンダーラインを引いた）

5. 悪霊・妖怪は、閉じた身体部位からも侵入する

背中に生じる怪異：背負っている荷物が重くなる（妖怪が乗ってくる）、死者の霊が背中に取り憑く。

背中の特徴：

＊直立二足歩行する人間の両眼は、顔面についているため、
背後は死角となりやすい。

＊常に他人の視線に曝されている。

→自らの視界が及ばず、背後で何が起きているかを確認できないため、無防備で狙われやすい。

一方的に妖怪、悪霊に狙われるだけではなく、身体を防御する工夫がなされてきた。→人々の身体観を知る手がかりに。

例) 妖怪から身体を守る：子どもの背守り

子どもの靈魂は、背中から抜けると考えられた。



「春日権現験記」よりトレース

結論：妖怪空間——でそうな場所・身体編

身体の開口部だけでなく、背中も妖怪に狙われると考えられた。背中では、視界が及ばないからこそ危険で、かつ「背筋が凍る」という慣用句が示すような身体感覚も関係したのではないかな。

注) 本発表は、『怪異と身体民俗学』〔安井 2014-b〕第7章「妖怪・怪異に狙われやすい日本人の身体部位」、第8章「狙われた背中」に新たな知見を加えたものである。

参考文献

- 勝俣鎮夫 1983 「ミ、ヲキリ、ハナヲソグ」 網野善彦・石井進・笠松宏至・勝俣鎮夫『中世の罪と罰』東京大学出版会
- 小松和彦 2006 (1986) 『「口裂け女」の意味論』『妖怪文化入門』せりか書房
- 常光 徹 2000 『親指と霊柩車——まじないの民俗』国立歴史民俗博物館
- 2006 『しぐさの民俗学——呪術的世界と心性』ミネルヴァ書房
- 秦 恒平 1984 『からだ言葉の本 付 〴〵からだ言葉、拾彙』筑摩書房
- 安井眞奈美 2009 「妖怪・怪異に狙われやすい日本人の身体部位」小松和彦編『妖怪文化研究の最前線』せりか書房（『怪異と身体民俗学』（2014-b）に所収）
- 2014-a 「妖怪から読み解く身体観」情報処理学会研究報告
- 2014-b 『怪異と身体民俗学——異界から出産と子育てを問い直す』せりか書房
- 2015 「怪異のイメージを追って——うぶめと天狗を中心に」天理大学考古学・民俗学研究室編『モノと図像から探る怪異・妖怪の世界』勉誠出版
- 2016 「妖怪が生まれるとき——目の妖怪」天理大学考古学・民俗学研究室編『モノと図像から探る妖怪・怪獣の誕生』勉誠出版



メ 毛



第 28 回 人文機構シンポジウム

「妖怪空間——でそうな場所——」要旨集

発 行 日 平成 28 年 6 月 11 日

編集・発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

〒105-0001 東京都港区虎ノ門 4-3-13

ヒューリック神谷町ビル 2 階

TEL 03-6402-9200 (代表)

<http://www.nihu.jp/>



大学共同利用機関法人

人間文化研究機構